弾丸シーモネーター（仮）

昔のあだ名がエロス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
弾丸シーモネーター（仮）

【Nコード】
N6184D

【作者名】
昔のあだ名がエロス

【あらすじ】
皆さんに一つ聞きたい事があります。皆さんの考える『純愛』とは、どんなですか？私は思う。近頃の純愛ブーム。ヒロインが死んで終わるというパターン。…そんなマンネリで良いの？ホントにプラトニックだけが純愛なの？Hな純愛があっても良いじゃない！セックスせずして、お互いのありのままを抱きしめ合わずして、何が純愛ね！…と、言うワケで。ただ甘ったるいだけの純愛ブームに、ありのままの描写で全く新しい旋風を巻き起こすべく、“香住丘のシーモ”こと、昔のあだ名がエロス先生が描く、純粋過ぎる性欲に

魅せられた少年達の痛快・爽快・切ない・純愛・ラヴ・ストーリー！——もうセックスの事しか考えられない。

1）その男、夜王（前書き）

この小説は一部適切でない表現があったり、人によっては気分を著しく害する場合がございます。あらかじめご了承下さい。

――作者より――

1）その男、夜王

　ひとつ聞いて欲しい事がある。みんなも一度は思った事があるはずだ。オレは思う。……正夢なんて絶対起こらない。

　――夜はいつだって、オレの為だけにあった。この世のすべての女が『挿入て』とよがって来る。どんなにプライドが高い女でも、3分もすれば尻をオレの前に突き出すしかできずにいた。まぁ、抱いてやらないけどね。だってもう相手は決まってるから。――さや。抱かれたい女NO．1のさやを抱くのがオレの日課だ。男共は今日もさやで千擦りこいてることだろう。しかし、オレはそんなさやを手慣れたように弄ぶ。ほら、オレの指テクに我慢できなくなって自分から股を開いてきた。今日もオレの腰の上でどんなダンスを繰り広げるのか楽しみだ。そこに、オレが絶妙な合いの手を入れる。さやの性感帯は知り尽してる。騎乗位しながら胸をいじられるのがさやは好きだ。そうすると、さやのダンスは一層激しくなる。さやの躯の下からのその眺めは見飽きることがない。オレ達2人は肌も抜群に合っていた。オーガズムのタイミングはいつも一緒だ。ヤバぃ、イキそうだ。あぁ、イクー！！――って手前でいつも目が覚める。がっかりした？……オレもだよ。

　こんな朝を迎えるのは一年前から。毎朝寸止めをくらうのはたまったもんじゃない。ちなみに、こんな夢を見るのはバイトが関係してるんだけどね。

夢の続きを見ようと二度寝しても続きを見れたことはない。それで

もいつも続きを夢見て二度寝するオレ。だから遅刻がしょっちゅう。今日もバイトが入ってる。大輔さん、遅れると怒るんだよな。二度寝する時間もないし…。とりあえず、元気になっている息子を大人しくさせるか。

……さやさーん！！

1）その男、夜王（後書き）

～ＢＧＭ≫さやかに別れを告げ、颯爽と電車に飛び乗るマサタカ。朝の柔らかな日差しとは裏腹に電車には罠が敷かれていた。レディーススーツの小悪魔の執拗な攻撃に、次第に心を許していくマサタカ。小悪魔は電車を何処へ誘（いざな）うのか。マサタカは胸の柔らかさに耐え、無事途中下車できるのか。少年達を乗せ、妄想特急が今走り出す。

次回、弾丸シーモネーター。『妄想先行系生涯童貞症候群』

2）妄想先行系生涯童貞症候群（前書き）

この小説は適切でない表現があったり、人によっては気分を著しく害する場合がございます。予めご了承下さい。

2）妄想先行系生涯童貞症候群

――タタントトン……――

朝の柔らかい陽射しに包まれて、電車が一台、町並みを抜けていく。通勤ラッシュの時間帯を過ぎ、車内は貸し切り。電車の刻む単調なリズムに、鼻歌で抑揚を付けるオレ。窓から差し込む陽射しは少し鳥肌がたつくらいの熱さで気持ちが良い。自然と脳細胞はストライキ状態。極めつけは座席の反対側の窓から見える、この風景の流れていく感じ。好きなんだよな。……なんだか頭がぼーっとしてきた。

――気が付くとすぐ隣にＯＬ風の女が一人座っていた。

レディーススーツって言うのかな？そんな感じの装いをしている。しかし、働く女性ってどうしてこんなに妖しく見えるんだろ。このシャツの間から見えそうで見えない胸の谷間（シャツのボタン上二つぐらい空いてるのがベスト）しかり、上品さを残しつつ、時には大胆に攻めに行くタイトスカートしかり。その全体的にタイトめにカスタマイズされたスーツは身体のラインをすべて浮き彫りにしている。

どんな綺麗な人かなーって言うか、近くないか？顔ちゃんと見れねーよ。普通に肩当たってるわ、髪は触れてるわな訳で。しかも、……何故そんなにこっちを見ていらっしゃるのですか？オレは人と目を合わせるのが苦手なんだよ。だから、そんな必要以上に視線を送らないで。車内は二人。目のやり場ならいくらでもあるだろ。なんて考えていると、女はいきなりこちらに向き直り、手を握り、自分の胸に引き寄せた。

……柔らかーい。

オレの注意は一瞬、彼女の手か、胸の谷間か分からない温かさに釘

付けにされた。そしてオレは彼女の顔を正面から見た。彼女もさらに熱い視線をこちらに飛ばす。自然と視線が絡み合う二人。相手の瞳に映る自分が確認できる程に二人の距離は近い。少し垂れ目気味の目は潤んでいて、男心を妙にくすぐる。肉厚の唇はやや“へ”の字型に曲がっている。その表情は何かを待っている。しかし依然として沈黙を守り続ける女。再び視線を交える二人。すると、女が目を閉じた。……なるほど。今ようやく分かったよ。フッ、オレも罪な男だな。もうなにも言わなくていい（最初から何も言ってないけど）、この恥ずかしがり屋さんめ。オレはそっと優しく彼女のうなじと腰に手を回し、目を閉じて待っている彼女の唇に自分の唇を優しく重ねた。それから激しく、より濃厚に舌を絡め合った。
オレのファーストキスだった。
名前も年も何一つ知らない女。
でも、愛ってこんな風に突然始まっちゃうのかもね。突然だから、準備もできてないから、進むしかないんだね。だってほら、いつのまにか押し倒してるし。すると、彼女も反撃するかのようにオレのジーパンのファスナーを下げてきた。……おいおいおいおい、いきなりクライマックスかよ。サタデーナイトはこれからだぜ。もう、自分で何を言っているか分からない。オレも彼女もこの場の雰囲気に流されているかも知れない。……それでもいいさ。一つだけ言える事がある。さらば、童貞のオレ――

小説とかでよくあるけどさ、人の夢ってどうして儚いんだろうね。なんでいつもいつも良い所で終っちゃうのよ。まぁ、みんなの予想通りと思うけど、また夢オチです。……はぁ？オレだってそうだよ。もっと先が見たいよ。見たいけど、終るから仕方ないだろ。そんなことより、夢に出てきた女の人。誰かに似てたような……。

――〇〇駅……――

おっ着いた。9時3分。少し余裕があるけど、いつも遅刻してるし、たまには早く行くか。そうして改札を出て、駅を後にした。――今日はいい夢が見れますように

2）妄想先行系生涯童貞症候群（後書き）

〜ＢＧＭ》肉体と精神の解放の瞬間、サタデーナイト。夢の一時の終演を告げる鐘を足跡に、螺旋階段を駆け上がるマサタカ。その先に待ち構える漆黒の魔神に、シンデレラボーイは為す術があるのか。激痛と葛藤。理想の追求が故に、マサタカが下した決断は。“奥の部屋”“惨劇”。この言葉の交錯する先にある、真意とは。次回、弾丸シーモネーター。『嵐の前の静けさってヤツはいつだって』

3）嵐の前の静けさってヤツはいつだって（前書き）

この小説は一部適切でない表現があったり、人によっては気分を著しく害する場合がございます。あらかじめご了承下さい。

3）嵐の前の静けさってヤツはいつだって

〇〇駅から徒歩20分ぐらいの少し山になっている所に建っている、増田ビル。――ここがオレのバイト先。周りの建物に比べて、一回り高い。中は薄暗く一見、人気がないように感じられる。しかも、完全防音なんだと。こんな田舎にこんなビル建てたら、逆に目立つって。入口には大抵鍵がかかっているから、みんな裏の非常階段から入るようにしている。集合5分前。余裕で間に合うけど、今日は念には念を入れて走って行こう。非常階段は駆け上がる度にカンカン鳴った。非常入口から中に入り、入ってすぐの部屋のドアを開けた。「おはよーございます。」――最後に使ったのは随分前の気がする。なんて気持ちのいい言葉だろう。遅刻をしないという事は実に清々しい。いつもは遠慮がちに開けるドアも、今日は思いっきり開けてみる。……しかし部屋の中ではいつもと変わらない景色が広がっている。準備はすでに整い、今すぐにでも撮影開始といった状態。あれれーどうして。今日は遅刻じゃないのに。オレが混乱していると、

――ボゴッ――

いきなり後ろからゲンコツ。何度もされたからか、オレがMだからかは分からないけど、この痛みには少し慣れてきた。……けどやっぱり痛い。オレが後頭部を押さえていると、「また遅刻か。このバカが」聞き覚えのある声。聞き飽きた言葉。恐る恐る振り変えるとホラ、大輔さんが腕組みをして不機嫌そうに立っている。足でリズムを刻んでいる――訳じゃないよね、こういう場合は。「今何時か、言ってみろ」大輔さんが囁くように言った。……嵐の前の静けさってヤツですか。とりあえず時計を見てみた。ちゃんと9時半4分前。「今日はちゃんと9時半前に着きましたよ」心の中で思った事がそのまま口から出た。だって、今日の時間配分に間違いはないはず。するると大輔さんは大きなため息一つ、「またこれだ」と掌を返して、

目を大きく見開き“やってらんないぜ”みたいなポーズをとると、

——ボゴッ——

またゲンコツ。だから痛いって。声には出さないけど（出したらまた殴られるから）。さすが元ＡＶ男優と噂される男、強烈だぜ。その見掛け倒しでない、アメフト選手を思わせるボディ。一見デブに見えるけどそうじゃない。すべて筋肉だ。もう９月だってのに黒く日焼けした肌と濃い体毛（主に腕毛）が、より一層力強く見せやがる。そしてドラ○ンボールのＭｒ．サ○ンみたいなダンディ髭。とても監督には見えない。

「だーれが９時半集合っつった。オレはな、９時３０分前って言ったんだよ。ったっく、そんなんだからいつまでたっても雑用なんだよ」って怒鳴りながらまた腕を振りかぶった。フッ甘い。そう毎度毎度ゲンコツ喰う程オレも鈍臭くない。今度はちゃんとガードしてるぜ。

——ドスッ——

はうぅぅ。フェイント入れてきやがった。初めての展開だよ。脇腹にドーンだよ。な、内臓に肋骨食い込むぅ。あーもう軽く呼吸困難だよ。思わず片膝をつくオレ。……やべっ、涙出てきた。我慢しろ、オレ。女の子達も見てるぞ。ただでさえ２０年間童貞だぜ。ここで泣いたら脱・童貞も夢のまた夢だ。いや待てよ、泣いた方が母性本能に揺さぶりかけれるかな。オレが悶えていると、「時間が惜しい、今から撮影始めるからお前奥の部屋の女優さん呼んでこい。あとメモ書いといたから、そこに書いてるの全部買ってこい、いいな　」書いたの絶対大輔さんじゃないだろ。「……もう少し待ってくださいよ、大輔さん」少しわざとらしくせきをしてみた。でも大輔さんが待ってくれるはずがない。「今すぐだ」顔近っ。こうやって迫られると圧倒されて、もう反抗できない。反則だよなー。さっき思い切り良く開けたドアを静かに閉め、オレは渋々部屋を出た。ハァ、いつまで雑用続くのかな。オレは奥の部屋に向かった。女優を呼ぶ為に。しかし、この後その“奥の部屋”で起こる惨劇をオレはまだ

知らない。あの瞬間オレは別次元に片足を突っ込んでいたのかもしれない。

3）嵐の前の静けさってヤツはいつだって（後書き）

～ＢＧＭ≫『彼女奥にいるから』。

すれ違う男の不敵な笑みに気付かず、言われたままに行動するマサタカ。その言葉の裏に隠された真意を読み取った時には既に、誘惑の連鎖に囚われていた。妖艶なる肉体が織りなす、無限の悪循環。光の射さぬ暗闇の中、極限まで追い詰められたマサタカは遂に“もう一人の自分”を覚醒させる。徐々にマサタカの精神を侵食していくレッド・ロッド。汚れし聖女が微笑む時、マサタカは悲しみのままに天へと駆け出す。次回、弾丸シーモネーター。『楽園へ』

４）妄想人と書いてドリーマーと読む（前書き）

根気強く４話まで読んでいただいた、そんなシーモネーターなみなさんには今更表現がどうのこうのと同じ事は言いません。ただ、この第４話のキャッチコピーを『この妄想に君はついてこれるか』と『この妄想の果てに君は何を見る』の、どちらにしようか迷ってます。

—作者より—

4）妄想人と書いてドリーマーと読む

“奥の部屋”に行く途中、廊下で今から呼びに行く女優さんと絡む男優とすれ違った。「チス」「うぃっす」互いに軽く挨拶を交わす。“彼女奥にいるから”、男優が顎で指し、撮影現場に入っていった。オレはまた軽く頭を下げた。——あの人、名前は……何て言ったっけ、忘れた。まあ、オレとは正反対のタイプだな。遊んでそうだし。きっとヤりまくってってんだろーなー。なんて事を思いつつ、ドアを2つ過ぎ、“奥の部屋”の前に着いた。

……フー。今日はなんか、やたらドキドキするな。緊張してるのか、オレ。まぁ、仕方ないか。何てったって、今日は人気赤マル急上昇中の女優さんらしいからな。「くっ。うぅ……あんっ」「あぁーっ。抜いて抜いて抜いてェ」通り過ぎた2つの部屋で撮られているAV（アダルトビデオ）。いつもは聞き慣れている　女優さんのあえぎ声でさえ、今日はやたらとムラムラくる。あっ。今まで言い忘れてたけど、オレのバイトってアダルト関連なんだ。なんでこの世界に入ったかなんて野暮な事は聞かない方向で。何故なら、……それが大人のエチケットってもんだから。

大きく深呼吸する。よし、ドアを開けるぞ。……中に入ったら、女優さんがシャワー浴びてたりして。それで、そのまま本番前に……。それともぉ、着替え中で「きゃっ」

「すっすみません」

「なーんて冗談よ。……あら照れてるのね。」

「自分童貞ですから」

「あらぁ、じゃーお姉さんがいろいろ教えちゃおっかなぁ」

「えっ。いろいろって……」
「決まってるじゃない。……」――プッ。何て夢見過ぎ。いつものパターンだよ。あるわけないじゃん。馬鹿だなぁ。……さて、くだらない妄想はこれくらいにして、そろそろ女優さんを呼びますか。
――コンコンッ――
「すみませーん。用意できたんで、スタンバイお願いしまーす」ドアを軽くノックする。声が裏返った。恥ずかしいなー、もう。……少し待ったが返事がない。
――コンコンッ――
もう一度ノックしてみた。今度はちょっと強めに。でも全くの無反応。……仕方ない、中に入るか。先程の妄想が脳裏によみがえる。エヘヘッ。今日こそは、ついに夢が現実になるかもな。２００６／９／１６。待ってろよ、今日をオレの童貞卒業記念日にしてやるぜ。掌を湿らせている汗はズボンに擦りつけた。ケータイも、ちゃんとマナーモードにした。よしっ、いくぜ。ドアノブに手をかけた。握る手に自然と力が入る。
――ガチャッ――
ドアノブを下におろした。ここでまた一息つく。落ち着け落ち着け、平常心平常心。何度も自分に言い聞かせる。
――期待も不安も全てを胸の内に秘め、少年は今大人になる。今こそ、妄想を現実にする時だ。うおぉぉおぉ。
――バンッ――
力んだせいで、勢いが着きすぎた。あぼぼぼぼ。しかし妄想に反して、部屋の中は電気がついてなくて、真っ暗。シャワーを浴びてる様子もない。なんだよー。妄想損だよー。ガッカリだぜ。とりあえず明かりをつけてみた。部屋の奥に行くと、カプセルホテルの１室の様にシングルベッドが１つ。そのベッドの上に人がバスローブ姿で、あお向けに寝ているのが分かる。ちっ、何だよ寝てんのかよ。もう本番始まるってのに。人の妄想台無しにしやがって。女優さんは悪くないさ。でもこの行き場を失った苛立ちは、女優さんにぶつ

けて晴らすしかなかった。仕方なく側に行って起こそうと思い、ベッドの近くに駆け寄った。ったく、どんな顔して寝てやがんだ。女優さんの顔を覗き込む。

「……綺麗だ」

一瞬にして、オレの中で混沌としていた苛立ちは浄化された。綺麗過ぎる。あまりの綺麗さに、それ以外に表現しようがない。空いた口が塞がらなかった。だって、髪は漆を塗った様に艶があり、全ての男共を虜にせんとするアメジストの如く、妖しく黒光りしている。もちろん、サラッサラなのは言うまでもない。シャワーを浴びてから寝たのかな、その色白の、きめの細かい身体からボディソープの柑橘系の香りが程良く香っている。グレープフルーツだな。そしてバスローブの隙間から大胆にこぼれている太もも。噛みつきてェ。スタイルも抜群ボンキュッボン。オレの視線は女優さんの身体の曲線をなぞるだけなぞった後、自然と胸に帰った。はっ。――気付かなければ良かったのだろうか。いや、男の本能が、いつもはモラルという名の“表面の自分”によって封印されている深層心理の中の性欲がそれを許さなかっただろう。緊張のせいか、どうして今まで気付かなかったんだ。現場では大事件が起きていた。――む、胸が、乳首が……半チラしているぅ。ＡＶ女優さんとは思えない、綺麗なピンク色した乳首。乳輪だってパーフェクトサークル描いてるぜ。

――雑用をやらされて約1年、数多の女優さんの胸を見てきた。その為、オレの鍛え抜かれた眼力は、瞬時にその女性が何カップなのかを正確無比に計る事ができる。ピピピッ。

――Ｉカップだと。一瞬、眼球の奥で水晶体が弾けるような錯覚に陥った。女優さんが呼吸をする度に、その有り余る爆乳が微かに揺れる揺れる。色、艶、形。全て申し分ない。

――顔埋めてぇ。素直にそう思えるよ。この状況でこの思考に至らない男はいないだろう。こんな無防備な姿を、バスローブでだなんて……。
全身の血液と神経が1点に集まっていく。ヤツの目覚めに理性の鎖が悲鳴を上げ始めた。
――バギーン――
突然のサプライズに、待ってましたと言わんばかりに息子はハイパーモード。理性の鎖を破壊し始めた。ヤツを包んでいた装甲は剥がれ落ち、中から真の姿があらわになる。高純度の真紅のボディ。空をも焦がす灼熱の気迫。いつも以上に熱をおびていて、湯気さえ見えそうだ。。部屋の壁紙の淡い感じの紫の妖艶さと、脳味噌をとろけさせるボディソープの甘ったるい香りも手伝って、理性の鎖が徐々に脆くなっていく。嗅覚と視覚は完全に女優さんに持っていかれた。それにつれて意識も朦朧としてきた。
ヤツの声がする。
――ダク　ダキタイカラ　キヅカレナイッテ　ダカラ　ダク　シカタガナイ　オトコダカラ　ダク――
――そうだよな。今日を童貞卒業記念日にするんだもんな。心も肉体も、ハイパーモードのアイツの手に落ちかかった時、気付けばオレの目の前には……
『……それでいいの、マサタカ』
――そうだ。そうだったよな。いい訳ないよ。オレは……。そこで、はっと我に帰った。
――妄想をもって、妄想を制す。心が折れそうになったとき、さやさんが寸でのところで引き止めてくれた。例え人気急上昇中であろうと関係ない。さやさん。貴方はいつまでもオレのNo．1です。

だって、オレのチンポはさやさんに捧げたんだもんな（妄想の中で）。オレは心の中でＮｏ．１ＡＶ女優さん、さやさんに対する想いを更に深めた。もう、この気持ちは嘘じゃない。オレの想いがパンパンに詰まった刀は、貴方の鞘でないと収まらないですよ。そうと分かれば、ハイパーモードのアイツをオレ自身の手で鎮めなければ。その場にしゃがみ、明鏡止水。……くっ、さすがに手強い。そんな防戦一方なのも束の間、第２の事件が起きようとしていた。

——天国と地獄って紙一重だよね。オレが息子を鎮めようと悪戦苦闘していると、頭上に何かの気配を感じた。しかし、それん感じた時にはもう遅かった。一瞬の油断が命取りとなる。

——ボギッ——

——存在するはずのない音。聞こえるはずのない音。でも、聞いてしまったから。否定したいけど嫌らしい程に、確かに耳に残ってる。でもおかしよ。ペニスの大部分は海綿体で構成されていて、その海綿体の内部は静脈洞が密集していてスポンジ状。副交感神経を通じて血流の量を調節。性的興奮、その他の生理現象により、静脈洞への血流が多くなると、海綿体が血液で満たされ勃起。つまり、チンコに骨はないんだよ。ないはずなんだよぉ。だけどっ。……だけどぉ。

さっき頭上に気配を感じた次の瞬間、

——ベッドから降りようとしたのかな、寝ている女優さんの足と思われる物体がオレの股間をクリティカルヒットしていた。それはそれは廃品回収で集められたアルミ缶を踏み潰すかの如く、ペニスの先っぽから根元までガッツリと。昇天美味の激痛と、何かが弾けたような熱さが股間で互いに主張し合っている。どちらも譲る事を知らないらしい。これはかりはもう悶絶するしかない。呼吸困難と全身麻痺を足して２で割ったこの痛み。思わずその場に倒れこんだ。

さすがにハイパーモードの息子も、これじゃ再起不能だな。
これからはオナニーもできないのかな……。今思えば、妄想ばかりの人生だったよな。死ぬ時は愛する妻の胸の中って決めてたんだけどな。どうやらそれも叶わないらしい……。今までの妄想が走馬灯になって駆け巡る。みんなともお別れなのか。
——最後に女の人を抱いていたかったな。目から涙一粒ヒラリ。この涙が今までで一番キレイな涙だったていう話はまた今度。
バイバイ、オレ。次生まれ変われるなら、もっとかっこいい身体がいいな。
ここで一度記憶は途切れる。

——チチチ……——
小鳥のさえずりが聞こえる。意識がハッキリしない。身体の感覚もどこか飛んでる。……あぁ、そうか。ここは天国なんだな。まさか、20歳で来るとはなー。にしても、最高にかっこ悪い死に方だったな。
なんて事を思いながら、少し時間が経った。だんだん意識がハッキリしてきたし、視界も開けてきた。眩しい。太陽かな。身体の感覚も戻ってきた。ゆっくり上半身を起こす。……アレ？もしかしてホントに天国？冗談のつもりだったのに。
なんと、周りは大自然に囲まれている。眩しい太陽。本日晴天。草花生い茂る大地。鳥達は舞い、獣達は互いにじゃれあっている。そしてオレは全裸。息子も無傷。むしろ前より逞しい。今オレがいるのは端的に見て、森の中の開けた場所のようだ。ここにいても何も分からないし、とにかく近くを探索してみるか。オレが行動を起こそうとすると、森の奥から女性が一人、こちらに歩み寄ってきた。
……裸で。オレの前で立ち止まり、にっこり笑った。よく見ると、

その女性は驚く事に、さっきオレの息子をノックアウトした女優さんにそっくり。さっきは目を閉じていて分からなかったけど、黒曜石のように透き通った綺麗な瞳をしている。吸い込まれそうだ。そして、その目でオレを見つめる。何か言いたげだ。
――おはよう、アダム――えっ。突然声がした。と言うより聞こえた気がした。頭に直接音が届いている感じだ。彼女の唇は動いていない。オレが戸惑っていると、また
――どうしたの。よく眠れなかった？――
まただ。誰かが話しかけてくる。でも彼女以外に人は見当たらないし、彼女の唇は動いていない。その時、突然頭痛に襲われた。うっ。
――大丈夫だよ、イヴ。動物達も側にいたから――
はぁ？何を言ってるんだオレは。イヴぅ？この女性の名前か。何で知ってるんだ。しかも何だろ、心と体が別々になったみたいな変な感覚。気分が悪い。
――さぁ行こ。みんな待ってるよ――
そう言って、イヴは花の様に笑い、オレの手を引いた。仕方ないので、ついて行くオレ。
――温かい。なんて温かい手だろう。ずっと触れていたいな。

しばらくして森の外に出た。森の中を歩いている途中、イヴと話しながら、自分の置かれている状況がだんだん理解できてきた。今オレがいる“ここ”は、どうやら生まれたばかりの地球らしい。……何だか夢のような話だ。でもってオレは、“はじまりの人”アダムとして神様からこの地球の管理者として造られたんだと。そして、オレのパートナーとして神様に造られたのが、今隣にいるイヴってわけ。……どっかで聞いた事ある話だよね。何故だか分からないけど、イヴは話せない。けど、さっきみたいに言っている事は伝わる。
“心と心が繋がってるから”とイヴは照れた風に微笑んだ。

イヴは綺麗だ。そして純粋だ。その事の証明の印の様に、透き通った瞳。涙をたっぷり溜め込んだ様に、潤んだ瞳。ずっと、その瞳に写っていたいと思った。そうするとイヴは照れて下を向く。どうやら“心と心が繋がってる”という事は、思ったことや考えたことがすべて、相手に伝わってしまうようだ。でも、別にそれでよかった。何故なら、既に互いを解り合っている気がしたから。お互い裸の身だけど、やましい気持ちは全然起こらない。イヴの純粋さがオレの性欲を浄化してるのか、元々この時代にはセックスという行為自体がないのかは定かじゃない。けど、そんな事もどうでもよかった。愛し合っている2人がいる。それを祝福してくれる鳥も魚も獣も植物も空に輝く星も、みんながいる。それでいいじゃない。オレとイヴは毎日抱きしめ合い、肌を、温もりを確かめ合った。そうする事で互いの気持ちを伝え合った。足も、うなじも、唇も、髪も、耳も……。イヴの全てをオレは愛しているし、イヴもオレの全てを愛した。

――陽光降り注ぐ森の中。背中合わせに座る2人。会話は途切れることを知らないの。今日もパーティーが始まるよ。2人だけの秘密の場所で――

イヴが陽気な鼻唄を歌い出す。ホントにそうだなと思とうと、イヴは少女のように無邪気に笑った。

いつまでも、こんな日が続けばいいな。

――幸せ過ぎて考えてもみなかった。この楽園に終りが来るなんて。

事の発端はある日イヴが持ってきた、赤色の木の実。――蛇さんが教えてくれたの。この木の実美味しいんだよって。だからアダムと一緒に食べようと思って持ってきたの――

イヴはいつも通り楽しそうだ。しかし、オレはここでピーンときた。

――コイツぁ食べちゃダメだ。これは善悪と知識の木の実。つまり林檎。『創世記』の通りなら、コイツを食べた瞬間ここを追い出されてしまう。イヴにも迷惑をかけることになる。なんとしても、この状況を回避しないと。……でも。そんな眩しい瞳で見つめるなよ、イヴ。

――どうして食べちゃ駄目なの――

この先の展開に関する思考はイヴには伝わらないらしい。何故って、それは……。どう伝えたらいいんだ。――何を迷ってるの。じゃあ、私先に食べるね――　あっ……。た、食べちゃったよー。やべっ。どうしよ。オレがテンパっていると、

――はい――

イヴが1口食べて、オレに林檎を渡した。……。こ、これは、もしや……間接キス。や、駄目だろ。駄目だって。あっ。あー。……食べちゃったよ。イヴの純粋さには逆立ちしても勝てないな、きっと。さて、これからどうしよっか。

――きゃっ。恥ずかしい、何で裸なんだろ――

イヴが自分が裸な事に気付いた。早く逃げないと、神様の使いが追って来る。オレの不安を察っしたのか、「大丈夫？顔色悪いよ」「あぁ、大丈夫だよ」話せるようになったんだね。イヴの一言は、全てを見透かした様に心の奥に響く。

――オレは今。イヴの笑顔を失いたくない。誰にも奪わせない。「逃げよう、イヴ」イヴはまた、照れて笑う。そしてオレの手を握る。この笑顔が有る限り、オレは誰にも負ける気がしない。

どれ程時が経っただろう。善悪と知識の木の実を食べたオレ達が自分と“同じ”存在になることを恐れた神様はオレ達2人に追手を差し向けた。イヴと共に追手から逃げる日々。苦しいながらも、オレ達2人は助け合い、互いに対する想いを一層深めていた。「大丈夫

かい、イヴ」「えぇ、少しつまづいただけだから」いつまでも続く追手の襲撃。永遠に終わらない旅路。それも、苦にはならなかった。2人がいれば……。

「我が名はケルビム。神の使徒也。神の法に背きし罪人2名を裁く為、参上奉る」ヤバぃ。また追手が来た。「逃げるぞ、イヴ」イヴの手を引っ張った。しかし、イヴも限界のようだ。あれからずっと歩きっぱなしだからな。もしもの時は……。

必死に走り続けた。それでも、追手は止まない。「神の法に背きし罪人よ。我が炎の剣の錆にしてくれる」そう言うと、剣の形をした炎（？）をオレめがけて投げてきた。相変わらず、キザな野郎だ。ヤバい、避けきれない。くそっ――

――嫌な事に限ってスローモーションで見えやがる。止めてくれ、こんな映像見せるなよ。誰か嘘だと言ってくれ。嫌だ、嫌だよ。イヴ……。

オレはただ両膝をつき、己の無力を噛み締めていた。涙も、声すら出ない。ケルビムの投げた剣は確実にオレを捕えていた。避けられないと覚悟を決めた時、何かとぶつかった。その場に倒れ、起き上がり振り返ると、……剣がイヴを貫いていた。くそっくそっくそっくそっくそっくそっ……。オレが。……オレがイヴを守るって決めたのに。拳を握りすぎて血がにじんできた。もう、あの温もりを感じられない。名前も呼んでくれない。血で染まった拳を何度も地面に叩きつけた。行き場のない後悔と憎悪をケルビムの糞にぶつけようとした時、その場にいた誰もが“それ”に釘付けになった。

――イヴが笑っている。身体を貫かれ、命を失ってなお、キミは笑っているのか。こんなふがいないオレを、自分を殺したケルビムさえも許そうと言うのか。突然涙が溢れてきた。今もなお、オレの心

を浄化してくれてる。ホントにイヴの純粋さにはいつも助けられてばかりだな。
――ビキッ――
剣が突き刺さった場所から、地面が割れた。そのまま底へ落ちていく。
――イヴ。善悪と知識の木の実を食べてから、思っている事全てが伝わることはなくなった。最期に笑ったキミはオレに何を伝えたかったのかな。いや、もうどうでもいいか。キミがいなくなった今。オレが生きている意味もない。……でも、例え罪人と罵られても、2人が愛し合った日々には意味があったよね――

――……すか――
人の声が聞こえる。意識がハッキリしない。身体の感覚もどこか飛んでる。……ここはどこだ。どこまで落ちてきたんだ。
――ぉーぃ――
誰かが呼ぶ声。だんだん意識がハッキリしてきたし、視界も開けてきた。眩しい。太陽かな。身体の感覚も戻ってきた。目を開けてみると、そこには
「イヴごはっ」
イヴがいたので抱きしめようとしたら、いきなり顔面にマッハ突きを入れられた。それで意識が戻った。見覚えのある淡い紫の壁紙。嗅ぎ覚えのあるグレープフルーツの香り。……夢だったのか。まぁ、そうだよな。普通に考えてありえないよ。普段から妄想激しいからな~。「あのぉ、大丈夫ですか」女優さんが聞いてきた。「大丈夫スよ。自分Mなんで」見れば見るほどイヴにそっくり。「あっそうなんですか。じゃあ、私先行ってますね」オレがトリップしている間、そんなに時間は経過してないみたいだ。「あーそれと。パンツ着替えた方がいいですよ。臭いから」女優さんはすまなさそうに部

屋を後にした。臭いから？　初対面で失礼なヤツだ。……と思ったが、実は第2の事件と同時に第3の事件も起きていた。ヤツ等は忘れた頃にやってくる。背筋がゾッとした。

――女優さんの足がオレの股間をブレイクした時、どうやら……イってしまったみたいだ。足でイかされたのだ。初めてのプレイがまさか足でだなんて。この時オレはあの女優さんに変態野郎の烙印を押された気分だった。肉体的ダメージと精神的ダメージを1度に負わされた。股間は精液が乾き、冷たい。まるで今のオレの心を写し出したかのよう。……とりあえずパンツ拭くか。

2006／9／16。童貞を捧げた。足に。

４）妄想人と書いてドリーマーと読む（後書き）

この話は勝負かけてるんで、特に評価・感想等を書いてもらえると嬉しいです。

番外編）作者からお知らせ（前書き）

『どーも、ヴォーカルのユーです』で有名なあの人が弾丸シーモネーターーに友情出演（予定）。もちろん偽名なんですけどね。誰か分かるかな？乞う御期待！

――作者――

番外編）作者からお知らせ

どーも！“香住丘のシーモ”こと、昔のあだ名がエロスです。
小説なかなか更新できなくて、ごめんなさい。
最近いろいろと忙しくて…（汗）。
さて、今回はお知らせがあります。
後書きとあらすじを変更しました。
後書きは次回予告風になってますんで、読んでくれると嬉しいです！そして、第四話が意味不明との声を多数もらいましたので、第四話を二つに分け、改訂版として書き直すことにしました！内容はあまり変わってないかもしれませんが、少しは分かりやすくなるハズなんで。あー、そろそろ執筆の続きをしないといけないんで…（焦）。それでは“変更”と打とうとして“援交”と打ち間違えた昔のあだ名がエロスでした。

P．S　昔の後書きの方が好きだったなって人の為に、昔の後書きをノクターンノベルの方に残してあります（＾ー゜）ｂ

で、終わるハズだったんですけど、最低６００字にしないといけないらしーんで、少し雑談しまーす。
この間初めてフリーハグと言うものを経験しました。
…実に素晴らしぃ！何か自然と楽しい気分になるよね。
何て言うのかな、抱き合う事でお互いに何かを与え、何かをもらってるような感じ？きっと世界中でフリーハグが普及すれば戦争も無くなるんじゃないかな？武器はもちろん、言葉さえいらない。ただ抱き合うだけで平和になっちゃう。これぞホントのラヴ＆ａｍｐ；ピース！…別に宗教とかじゃないから。以上どうでもいい話でした。

番外編）作者からお知らせ（後書き）

待ち長いかもしれないけど、読んでくれるならずっと待ってて欲しい。それ以上は望まない。あなたの重荷にはなりたくないの。

――作者――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6184d/

弾丸シーモネーター（仮）

2010年10月14日17時30分発行